

# 残像の脈々

～vol.1～

皆さんがこの文章を目にされているということは、  
「残響の血脈」がようやく公開されて、僕も一つの役目を果たし、  
皆さんの満足げな表情を拝見しながら安堵感に浸っている頃でしょう。

うん、そうであってほしい、、、。きっとそうだと信じます。

さて、この「残像の脈々」、

皆さんは何のこっちゃって感じでしょうが、ここでは「残響の血脈」の

舞台裏、アナザーストーリー、メイキングのような、、、  
あくまでも僕の視点で捉えた「もうひとつの残響の血脈」を

文章ベースで描きたいと思ひまして、

ライブ・ビューイング・ジャパン(以下LVJ)の川上さんに

このような場所を設けていただきました。

この文章を読んでから、再び映画を見返すとまた少し違った印象で

楽しんでいただけるのかなと思います。

このタイトルも、

5人との思い出はずっと僕の中に脈々と存在し続ける、、、

そんな気持ちでネーミングしました。

あと、脈々っていう響きもゆるさあり可愛らしさありで、

なんかマッチしてるかなとww

こんな感じで、映画とはうって変わって、ゆるーく進めていくので、

お茶やお酒を飲みながらでも、食事をしながらでも、

或いは家で寝っ転がりながらでも、

リラックスして楽しんでいただけたらこれ幸いです。

ネタバレ全開でいくので、本編を見終わった後に読んでくださいね。

この作品の企画の輪郭がはっきり見え始めたのは、  
今年の1月頃だったと記憶しています。もう少し前だったかな？  
それまでは、「海外ツアーのドキュメンタリー映像を撮影する」  
主軸はこのように、ぼんやりとざっくりしたものでありました。  
この辺りはパンフレットのインタビューでお話しているので、  
割愛させていただきます。

あ！カットされてたらどうしよう、、、。

その時はどこかでつぶやきますね。

そんなこんなで、「DIR EN GREYの映画を作ろう！」  
そのひとことで、「残響の血脈」が始動したわけでございます。  
この言い方だと、なんだか見切り発車のように聞こえますが、  
決してそうではないので、誤解しないでください。

この作品の配給会社でありますLVJの川上さんが、  
社内や事務所の皆さんへプレゼンをして下さったり、  
死ぬほどアクションをしてくれましたし、  
制作会社 利休Inc.の田村プロデューサー(以下たむP)も、  
予算を度外視して快諾してくれました。

そして

DIR EN GREYの皆さん、  
DYNAMITE TOMMYさん、  
チーフマネージャーの高林さん始め、  
事務所の方々も面白がってくれた、  
そんなみんなの思いが集結したからこそ始動した作品なのです。

改めて、「残像の脈々」の始まりでございます。

既に映画をご覧になった方はお分かりだと思いますが、  
本作の内容をざっくりお伝えすると、、、  
ライブ映像をメインに、インタビュー映像とドキュメンタリー映像の  
3つのシーケンスで構成された作品です。  
「残像の脈々」でも、この3つのシーケンスを  
詳しく紹介していきたいと思います。  
まず最初に、今回のライブ映像について触れていきましょう。

## ライブ映像

当初はパリで収録する予定でした。

その理由は、、、

ただただ会場がカッコいい！

大きなスクリーンに写した時に迫力満点！

それが理由でした。

ただ問題がひとつ、

収録するには会場に撮影費を払わなくてはなりませんでした。

ロケ使用料のようなものです。

できるだけ、収録費用に予算をかけたい！カメラの台数も増やしたい！

ということもあり、パリでの撮影は断念せざるを得ませんでした。

だったら、最終地ベルリンで収録しようということになったのです。

ベルリンにした理由は二つありました。

ひとつは先にも述べたツアー最終の地であること、

もう一つはベルリンはアートに寛大な街なので、

撮影は様々な場合に融通がきくということでした。

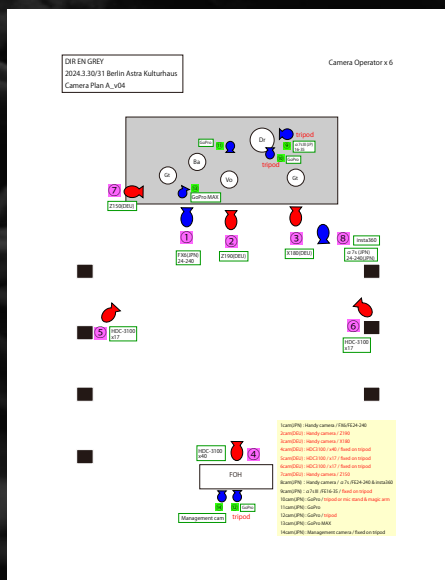
さすがヴィム・ヴェンダースが生まれた国でございます。  
という二つの理由でベルリンで収録することになったのです。

ここで少しだけ、皆さんが手にしてるような  
パッケージBlu-rayやDVD、BSなどで放送されているライブ映像が  
どのような流れで作られているのかを触れさせてください。

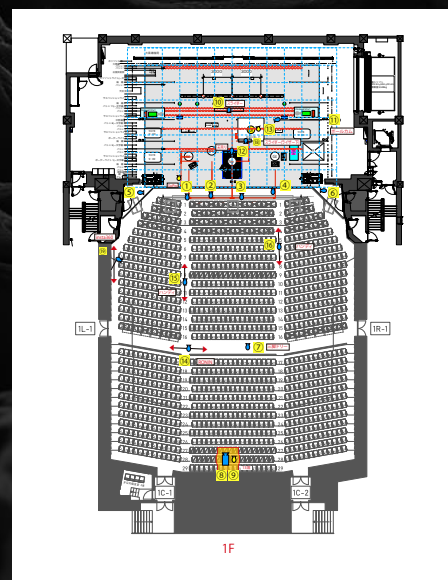
まず最初に、事務所もしくはステージチームから、  
ステージの形状やメンバーの立ち位置、

客席(ライブ会場を真上から見下ろしたものをイメージしてください)が  
落とし込まれた会場図面をいただきます。

そこにカメラの形をした図形を落とし込んでいき、  
カメラ位置を決めていきます(これをカメラ図面と言います)。



ベルリン公演時のカメラ図面。



LINE CUBE SHIBUYAで行われた  
TOUR24 PSYCHONNECT時のカメラ図面

演出やステージの雰囲気毎回変わるので、  
それに応じてカメラ位置を考慮しながら反映させていきます。

と同時にカメラの機種やレンズを選定していくのです。

本番日までの期間は資料映像

(例えばツアー初日などでステージ全体が見える固定カメラの映像)

を見ながら、楽曲ごとに撮影の方法を考えます。

そして本番に臨みます。

本番中は全てのカメラの画を見ることのできるマルチ画面を見ながら

「この曲は斜めにしたり変な画角で撮りたい」とか

「アップが多めの狭いイメージで撮りたい」など

カメラマンにインカムを使って指示を出して撮影します。

ただし条件によってはマルチ画面を見ながら

指示を出せないこともあります。

その場合は、僕もカメラマンと一緒にになってカメラを回します。

(ベルリンの時はこのスタイルでした)

撮影が終わると編集作業です。

撮影した素材を、更に楽曲の世界観に近づけるように

一曲ずつカットを繋いでいきます。

僕はこの作業を「描く」と言っています。

画を繋ぐだけではメンバー皆さんが、

臨場感と共に感じて見た景色には近づけないのです。

「描く」という気持ちで編集することで

やっとその時に見た景色に近づけることができ、

時には「そこ」で感じた時よりも、増幅したものができたりします。

「描く」という気持ちは、僕にとってもミュージシャンにとっても

とても大事な気持ちなのです。

編集作業が終わった後は僕の手から離れ、  
パッケージという作品になって皆さんのお手元に届く。  
そうやってライブ映像作品は作られてるのです。

話はベルリンに戻ります。

ベルリンも同じような工程でライブ映像は制作されていきました。

いつも二人三脚で映像を一緒に制作しているたむPと共に、

カメラ図面を作っていました。

今回ただひとつ違うことと言えば、

カメラマンや機材周りを仕切っている人は全てドイツ人。

日本からの撮影チームは、僕とたむPの二人だけ。

僕は全く英語が話せません。

多少話せるたむPがドイツチームと連携して、

日本とドイツのリモート打ち合わせから、本番の現場まで、

ずっと心強い味方でいてくれました。



制作会社 利休Inc.プロデューサー田村洋(タムラヒロシ)  
別にビールに囲まれている訳ではない

たむPよ、ありがとう！！この男の紹介は後ほど、、、。

なので、本番当日のカメラのセッティング等は  
何のトラブルもなく進んで行きました。

あったとしたらただひとつだけ、  
まあトラブルというトラブルではないのですが、

カメラポジションを一箇所、  
変更せざるを得ない問題が発生しました。

元々、薫さんを真横から狙おうとしたポジションに  
カメラが置けないことが、  
現場を見て初めて分かりました。

(ステージ間口が狭く、薫さんのすぐ横にカメラマンが立てない)

まあ現場で初めてわかることなんて多々あります。

カメラ図面通りにはいかないものです。

薫さんからも「ここに(カメラマンが)立つの？近いよね？」と  
当然の如く突っ込まれ、

急遽ステージ前に下ろすことになりました。

正面から見ると5ショットのはずが6ショットになってしまう、、、

結果、これで良かったなと思っております。

それ以外は特に大きなトラブルはありませんでした。

日本では気心知れたカメラマンと  
コミュニケーションをとりながら撮影するのですが、  
今回はドイツ人、初対面、英語が話せない、  
ベルリンだけに高くて分厚い壁が立ち塞がっていたので、  
正直思うような撮影ができない、  
フラストレーションを抱えながらの撮影でした。

撮影後、ホテルで素材チェックをしましたが、  
高い壁が立ち塞がっていたのにも関わらず、  
なんともかっこいい画が上がっておりました。  
ここでようやく壁が崩れ落ちたような安堵感を感じました。

流石っす、ドイツチーム！

こうして二日間のライブ収録は無事に終了。

たむPと二人だけで打ち上げ、  
長くて重いジョッキに入ったドイツビールで乾杯しました。



ドイツのビールはでかい！



ソーセージと肉しかない！主食はマッシュポテト！米はないか？！  
ですが、どれも美味しかったです。



今回はドイツと日本の混同チームでの収録だったので、  
現地カメラマンに、DIR EN GREYを撮影する際の心得を  
伝えることはできませんでした。

国内の撮影の際は、カメラマンの皆さんに必ず伝えることがあります。

それは、

美しく儂い花を撮るような感覚、

ナショナルジオグラフィックの野生動物を撮影するような感覚を

イメージして撮影に臨んでください。

そして極力カメラを動かさずに待ち構える気持ちで

撮影に臨んでください。

これは、ここ数年で僕の中から出たひとつの答えのような、  
あるいはコンセプトのような気持ち。

これを本番前にカメラマンの皆さんに伝えるようにしております。

この「残響の血脈」のライブ映像も、そんな思いで編集しましたので  
それを皆さんに感じてもらえたら嬉しいです。

次回はインタビュー映像やドキュメンタリー映像の舞台裏なんかに  
触れていくので、どうぞお楽しみに！

Vol.2に続く、、、。